

— 綜 説 —

徳川時代に於ける本草學概論

渡 邊 幸 三

WATANABE, Kôzô : General Review of Honzô or Herbal Study in Tokugawa Era.

序 説

そもそも中國に於ける藥に關する智識は相當に舊く、傳説に據ると、神農氏によつて創始されたことになつてゐる。然し藥の智識が藥學として體系化されたのは、種々の科學的研究の結果、先秦末から漢初(B. C 210年前後の5, 60年)にかけてであらう。此の藥學が現在の如く「本草學」と呼ばれるようになったのは比較的遅く、史傳によれば、前漢の成帝(B. C 32年)の時にはじめて見出される。「藥學」が「本草學」と呼ばれる理由に就いては、未だに定説と見做されるものがない。例えば蜀本草の作者韓保昇は、「藥には玉石草木蟲獸が有るにも拘らず、本草と云うのは、諸藥の中で草類が最も多いからである」

と言つて居る。此の説は最も通説とされておるが、「本草」の「本」の字をこのように解釋するのは、些か穩當ではないように思われる。又我國の尾臺榕堂や中尾万三博士は、漢書藝文志經方條の説明文に「經方者。本草石之寒溫。」云々とあるのをその典據と考へておられるが、牽引附會の感がある。私は常識的に見て、「本草」の「本」は根本、根幹の謂であつて、「草」と互言したもので、草根木皮の義と解するのが、おだやかであると思う。何はともかく、本草の語源に關する研究は後日に譲ることにし、「本草」なる語のもつ内容範圍に就いて述べよう。此の問題を解決するには、先ず「藥」の概念を明確にしなければならぬ。神農本草の作者である梁の陶弘景は、藥を上藥、中藥、下藥の3種に分け、その上藥をば、

「命を養うを主どり、以て天に應ず。毒なし、多く服し、久しく服するも人を傷けず。身を軽くし、氣を益し、不老延年のもの」

と説明している。又實際に神農本草經に就いて見るに、上藥は何れも日用食物又はそれに類するものが大多數を占め、中藥下藥に至つて、我々の今日での概念の藥に屬するものが殆ど全部である。従つてその藥の概念は現在我々の意識する概念よりも、はるかに範圍が廣く、即ちその藥學は近代的意味に於ける藥學と博物學とを兼ねるものである。その藥學が即ち本草學である以上、本草學は近代的な藥學と博物學との兩面を有するものと考えべきである。中國の本草學は昔より今に至るまで、此の兩面を持ちつづけて發展して來たものである。此所に注意を要するのは、中國の本草學は、その博物學的な面に於ても、その根本意識に於ては、例えば藥の眞偽鑑別新發見等の如く、飽くまで彼等の意義に於ける藥を目的對象とする學であつて、近代的な博物學が、例えば博物の爲の博物學であり、植物の爲の植物學であるが如き意識はなかつた。此が本草學と博物學との根本的な相異點である。

中國で發達した本草學は、早くから我國に輸入され、特に徳川時代に於ては非常に發達した。その本草學は、例えば稻生若水、小野蘭山に於ても見られるが如く、その本草學的努力は、飽くまで藥を目的とし對象としたもので、我國に蘭學が隆盛となり、強くその影響を受けるまでは、上述せしが如き意味での本草學であつた。即ち宇田川榕庵等の盡力により西洋的博物學の輸入と共に、我國の本草學は次第に博物學へと移向し、藥學の支配から脱した。本稿に於て私は主として上述せる意味の本草學を概論し、博物學方面のは他日に譲ることにする。

然し、上述せしが如く、本草學は藥を目的としたものであるとは言へ、藥學的な面と、博物學的な面の二面がある。故に便宜上藥學的本草

學と博物學的本草學とに章を分けて説明することにする。

第1章 藥學的本草學

藥學的本草學はその性質上その時の醫學説の支配をうけ、醫學説とその消長をともしするものである。今徳川時代の醫學を概観するに、徳川前期に於ては所謂後世家が、中期には所謂古方家が、後期には所謂折衷家が夫々醫學界を支配した。故に今は後世家の藥學、古方家の藥學、折衷家の藥學に分けて述べることにする。

1. 後世家の藥學

徳川前期に於ては、室町の末、田代三喜によつて輸入され、その門人曲直瀬道三によつて大成された所謂金元醫學を遵奉する所謂後世家の醫學が天下を支配していた。此の金元醫學は、金元の間に劉河間、張子和、李東垣、朱丹溪等によつて完成されたもので、その醫説は宋の性理學の影響を受け、陰陽五行、五運六氣を根本理念として組立てられたものである。徳川前期に於ては、此の金元の學が行われたのであるが、之を後世家と言うのは、後述する古方家が漢唐を祖述するに對し、此の派は漢唐よりも後世である金元を遵奉するからして後世家と呼ばれるのである。

此の後世家の藥學は、後世家の醫學に對應するものであることは言を俟たない所であるが、此所に注意すべきは、慶長11年(1601年)に、林道春が長崎に於て、明の李時珍の「本草綱目」を入手し、之を駿府に奉り、之が大いに行われたことである。李時珍は金元學派に屬する代表的な醫家であり、その藥學は金元學派の藥學である。此の李時珍の藥學は、本草綱目卷1卷2の序例に詳記されている。此の序例が、元和(1615年)から寛永(1628年)に涉つて、しばしば翻刻されておることから推しても、之が後世家に與えた影響が如何に大きかつたかを知り得る。即ち後世家の藥學は皆李時珍を祖述布衍したものと云つても過言ではない。後世家の藥學は此の本草綱目の序例に基き、曲直瀬道三の切紙を參考として見たならば、その全貌を知り得ると思われる。次に後世家の藥學の一斑を示す

ことにする。

1. 引經報使 例えは黃連は手少陰心經に、升麻は手陽明大腸經に行く藥とするが如く、十二經にはそれぞれの經のみに作用する特別の藥があることを説き、補瀉溫涼ともに、此の原理を利用して行ふのである。これは金元學派の重要な原則の一である。

1. 氣味陰陽 藥には寒、熱、溫、涼の氣があり、甘、辛、苦、酸、鹹の味があり、升降浮沈の相異があり、陰陽厚薄の別がある。故に用藥には、天地の氣運、症狀の虛實を察してその藥能の適否を定むべしとする用藥上の原則である。

1. 君臣佐使 病により、夫々藥に君(主藥)臣(副藥)佐使(補助藥)がある。配劑の時守るべき原則である。

1. 相須、相使、相畏、相惡、相反、相殺 此は藥性によつて、二つ以上の藥を配合する時、上記の六つの中の何れか一つの關係がある。例えは二つの藥が相惡みあうもの、たがいに相殺しあうものの如きである。此の關係を明確にして配劑すべしと言う配劑上の原則である。

此の外六陳八新、七方、十劑、五味宜忌、五味偏勝、四時用藥例、五運六淫用藥式、等等の如き藥學上の諸原則がある。その詳しい内容は他日に譲ることにするが、之を要するにその藥理藥學は、陰陽五行、五運六氣の説をたくみに配合活用したものに過ぎない。

上述せるが如く、後世家の藥學は何れも本草綱目の藥學の祖述布衍につとめ、見るべき何等の進歩もなく、又表彰すべき著作もなかつた。今強いてその2, 3を擧げるに、

曲直瀬玄朔……藥性能毒 異名製劑記

岡本玄治……家傳預藥集

岡本一抱子……藥性記辨解

田中三朴……増補藥性能毒

久米田仙庵……煮藥指南

等の數種に過ぎない。

2. 古方家の藥學

上述せしが如く、徳川前期に於ては後世家の醫學が全盛を極めたが、次第にその説は荒唐無

稽に奔り、甚しきは易の理論のみで一切を治療する所謂易醫さえ生ずるに至つた。此の風潮を排し、所謂古方家なるものが生じた。此の説は名古屋玄醫、後藤良山によつて提唱され、寛保延享の間(1741年~1747年)吉益東洞によつて大成され、遂に後世家を壓倒し、天下を支配した。而して寛政年間(1789年—)多紀氏が所謂折衷派を確立するまで、その勢力を保つた。即ち徳川中期の醫説は皆此の派に支配されたとはい得るのである。

此の古方家の主張は金元を排して漢唐の醫經に溯り、特に漢の張仲景の傷寒論金匱要略を聖典とまで崇め、金元の陰陽五行五運六氣を邪説として排斥し、飽くまで實驗親試を重んずる實證主義的なものであつた。此の説は、金元よりも舊い漢唐を尊崇したから、後世家に對して古方家と稱されるのである。

斯くも如く、古方家の醫説が革新的であり、實證的である以上、その藥學も亦革新的であり實證的であつて、前期の後世家の陋習を打破して面目を一新し、中國藥學から脱脚して、日本漢方藥學を樹立した。その先驅をなしたのは、後藤良山の門人香川修庵である。

修庵は良山の出藍の譽ある門人であつて、自ら儒醫一本論を唱え、一本堂行餘醫言を作つた有力な古方家である。彼は享保年間(1716年—)一本堂藥選を作つた。此の書は神農本草、名醫別錄及び唐宋元明の諸本草書記載のものの中から、實際に施用して效驗あるもの、及び自ら實驗して效能あるもの365種を撰び出し、その試效(主治)撰修(製法及び鑑定)を詳述し、後世家の遵奉する氣味の説、陳新の論を排斥し、相畏、相惡、相反は偶然に起る現象にして決定的な説に非ざるによつて拘泥すべからずとなし、又後世家が最も重要視する引經報使の原則、升降浮沈陰陽の理論をば根も葉もなき空論であると斷じた。即ち彼は飽くまで實證的な態度を持ち、實際に效能のあるもののみを採用したが爲に、その藥品は僅かに365種に過ぎなかつた。以て如何に彼が實證主義的であつたかが知られる。

上述せるが如く、修庵の藥選が後世家の非を

辨じ、その久弊を打破せんとしたことは、斯學の進展上特記すべきであつて、古方家藥説の方向は之によつて定められたのである。之につき吉益東洞が藥徴を作るに及び、古方家の藥學は、完全に中國的藥學の支配を脱し、日本的なものとして大成された。

即ち東洞は明和8年(1771)年に、彼が聖典とする傷寒論、金匱要略所載の藥品にして、自ら試みて實用に適するもの53種を選出して藥徴を作つた。此の書は、各藥品につき、第一に「主治」を論じ、次に「考徴」即ち之を適用すべき證候を明白にし、次に「互考」を置きて、傷寒論に徴すべき方のないものを、參互して考へてその義を明かにし、次に「辨誤」によつて、古今藥效の誤を訂正し、次に「品考」を論じて、藥材の良否眞偽を定めた。此の書は東洞自らの體驗を基とし、全く漢の張仲景を祖述布衍したもので、その論説は痛切にして、完全に後世家の藥學を打破して、古方家の藥學を樹立したものである。

特に此の書に於て注意すべきことは、從來の藥學では、一藥には數種の藥效があるとされていたが、此の書では一藥の效能はただ一つであると論じ、所謂一藥一能説を主張したことである。即ち一藥に多能があるが如くに見えるのは、それは皆「方」の功であつて、藥の能ではないとするものである。東洞は醫學に於ては、「萬病一毒説」を主張し、藥學に於ては「一藥一能説」を述べて之に對應せしめたのである。

東洞の子南涯は、醫學に於ては父の「萬病一毒説」の行過ぎを修補して「氣血水論」を唱えた。従つて藥學に於ても之に對應して、氣藥、血藥、水藥の存在を認めて、氣血水藥徴を作つた。之は東洞の藥徴を系統的にした功はあるが、「一藥一能説」は却つて没却されてしまつた。

斯くて古方家藥學は修庵、東洞、南涯等によつて確立され、古方醫學の隆盛と共に、その藥學は傷寒論等に記載される所謂古方藥品の研究にその中心を置くようになつた。此の派最後の代表作と見られるものに、内藤蕉園の古方藥品考がある。此の書は天保12年(1841年)の作で、傷寒金匱の藥品220餘種を取り、その藥性、

薬功を辨明し、主要薬品には圖を加えたもので、その記述は正確にして整頓せるものと言われている。

之を要するに、古方家の薬學は、後世家の遵奉する本草綱目的薬學を、實證主義的態度によつて打破し、日本独自の古方薬學を樹立したもので、優秀な著述も少くはない。今その代表的なものを挙げるに次の如きである。

香川修庵……一本堂薬選
 戸田旭山……非薬選
 松岡恕庵……用薬須知 千金方薬註
 吉益東洞……薬徴
 吉益南涯……氣血水薬徴
 村井琴山……薬徴續編 類聚方議
 内藤蕉園……古方薬品考

3. 折衷家の薬學

古方醫學は後世家の僻見謬説を排斥し、實證主義を旨として一新生命を拓き一世に行われたのであるが、東洞以後その説は益々武斷に流れ、その弊言うにたえざるものがあつた。此所に於て偏執の論を惡み、衆説を折衷して中庸の途を求むるものが次第に多くなつた。望月鹿門、山田圖南、福井楓亭などがその優なるものである。此の風潮は遂に寛政の間（1789年—）多紀元徳、元簡、元胤、元信等の多紀氏の人々によつて大成された。此の人々たちは、儒學の考證學の方法を醫書に應用し、羣籍を考證し、衆説を折衷して一是に歸納せんとした。故に考證家又は折衷家と呼ばれる。此の派は次第に古方家を壓して行われ、當時隆盛に向いつつあつた蘭醫方と拮抗して降らず、徳川時代を終るまでもその勢力を保持した。

之を要するに、此の折衷家の目的とする所は衆説を折衷して中庸の途を得るに在つた爲、その方法は主として文獻學的な考證を用いた。その結果、亂雑な醫書は整理されたが、實際の臨床から離れてしまつた。此の點古方家に感ぜられる迫力を感じ得ない。

従つて折衷家の薬學も、その殆んど全部が文獻學的考證に終始し、古方家薬學に見られるが如き、創意卓見は望むべくもない。此の派の代表作と見るべきものは、多紀元堅の薬治通義で

ある。此の書は天保10年（1839年）の作で、諸劑概略、方劑藥性氣味、製薬、服薬法等の諸項につき、古今の諸家を折衷し、系統的に記述している。此の書には見るべき創見はないが、漢方薬學はこれによつて文獻學的に整理大成されたと言ひ得る。此の派に屬する代表的なものには次のものがある。

多紀元簡……薬性提要 藥雅
 山本高明……訂補薬性提要
 多紀元堅……薬治通義
 華岡青洲……薬方口訣

此所に一寸附言したいのは、徳川後期には蘭方醫薬學が相當盛んになつていた。此の蘭方醫薬學が漢方醫薬學に如何なる影響を與えたかと言う問題である。蘭方が盛んになるにつれ、之を漢方に折衷せんとする人々があつた。山脇東洋、永富獨嘯庵等がその代表的な人である。然しその折衷工作は失敗に歸した。蓋し漢方は全體的思索的を本質とし、蘭方は分析的實證的を本質とする。此の本質の相異は當時の研究方法を以てしては打開し得なかつた爲と思われる。従つて蘭方は部分的には漢方に影響を與えたことは否定し得ないが、漢方に本質的な影響は與え得なかつた。即ち徳川時代を終るまで、漢方と蘭方とは對立關係に置かれ、明治に入つて漢方は敗退した。

第2章 博物學的本草學

博物學の色彩の濃い所謂博物學的本草學はその性質上その時の醫學説の支配を受けることが少く、比較的自由に独自の發展過程をたどつた。今はその發展段階により、本草綱目時代、日本本草樹立時代、和蘭本草折衷時代に分けて述べることにする。

1. 本草綱目時代

本草綱目時代とは大體に於て、徳川の初期から貝原益軒が大和本草を作つた寶永10年（1709年）頃までを指すのであつて、その本草學界は全く本草綱目の支配下に在つた時代である。

徳川時代以前の本草學は殆んど藥學的本草學であつた。徳川時代に入り天下は泰平となると共に、本草研究も次第に昂る氣運にあつた。丁

度此の時、林道春が慶長 11 年 (1601 年) 長崎に於て明の李時珍の本草綱目を入手し、之を駿府に獻じた。本草綱目は中國の本草學を集大成したと言われる大著である。此の書はいたく我が本草學界を刺戟し、本草研究は一大飛躍をした。即ち此の本草綱目は數回に涉つて翻刻され、又寛永 15 年 (1638 年) には江戸に 2ヶ所の藥園が作られる等はその一斑に過ぎない。然しその本草學の程度は餘り高くはなく、殆んど本草綱目の研究祖述に終始した。例えば稻生若水は「庶物類纂編輯始末」に、「本草綱目出來申候以後は後の人皆此の書の外に泄れ候事は無之と心得候」と言つておるが如きは此の間の事情を物語るものである。又事實、此の時代の代表作と思われる諸書に就いて見るに、例えば林道春の多識篇が本草綱目の抜粹であるが如く、本草綱目の研究祖述布衍に過ぎず、全く本草綱目の支配下に在つた。此の時代の主な作には次の如きものがある。

林道春……多識篇

中村惕齋……訓蒙圖彙

新井白石……東雅、詩經名物圖

貝原益軒……日本釋名

寺島良安……和漢三才圖會

向井元升……庖厨備要大和本草

平野必大……本朝食鑑

2. 日本本草樹立時代

日本本草樹立時代とは貝原益軒の大和本草を作つた寛永 10 年 (1709) 年より小野蘭山の本草綱目啓蒙の成つた享保 3 年 (1803 年) に至る約 100 年間を指すのであつて、此の時代は本草綱目の支配から漸く脱し、日本本草學が樹立された時代である。

そもそも中國に於ては本草學は非常に早くから發達したが、その後繼者等はただ前書の踏襲に是れつとめ、ただほんの僅かばかりの自己の調査觀察を加えたに過ぎない。この事は經史證類本草を見れば、容易に理解される所である。即ち後世に於ける中國の本草學は、極言すれば文獻整理的に編纂された本草學であり、思索して作られた本草學であつて、觀察され、體験され、調査された本草學ではない。従つてその記

述にも誤謬が多く、特に本草圖には、架空のものさえ畫れている。小野蘭山、稻生若水が明かに指摘しておるが如く、斯る誤謬は本草綱目にも甚しいのである。我國の本草研究家は、本草綱目研究の進歩と共に、此の弊に氣付き、之に飽き足らずとし、より實證的な精確なものを求めるようになった。斯る氣運の先驅者は貝原益軒である。

益軒は非常な博學と熱意を以て、當時の新知識であつた本草綱目を研究し、夙に本草綱目を校訂複製し、又本草綱目和名目錄等を著作した。本草綱目に對する知識の増加と共に、實證的な彼は本草綱目の據るに足らざるを知り、遂に寛永 10 年 (1709 年) に、80 歳の老齡を以て大和本草 16 卷を作つた。此の書は、彼が和漢を對照して親しく物産を研究し、自ら調査觀察を加えたもの 1362 種を選び、之を彼獨特の分類法によつて分類したのである。特に注意すべきは、此の 1362 種の内、458 種は日本個有のものとして、漢名を附せず和名のみを附している。此は彼の識見を窺うに足るものである。斯くの如く此の大和本草は全く本草綱目の支配を脱した劃期的な述作であつて、日本本草學の基礎はここに開拓されたのである。

此の大和本草に次ぎ、日本本草學の基礎を確立したものは、稻生若水の庶物類纂 1000 卷である。

若水は早くから本草學に志し、博く書を読むと共に實地に調査することを旨とした。元祿 7 年 (1694 年) 40 歳の時、藩主加賀の前田松雲公に上書して、

「本草を實地に精査したものは自分 1 人であると信ずる。今後更に研究を進め不朽の重寶となる著述をしたい。且つ自分の研究が完成したならば、中國から夥しい藥材を輸入しなくともすむと思ふ。自分は生來虛弱で長命は望み得ない。自己の此の研究を死と共に朽ちさせるは残念である」

と言ひ、研究成果を著述することを請うた。松雲公もその意氣を嘉し、著作の完成を命じた。若水は 1000 卷の大著を作る豫定で、研究を進めたが、262 卷を完成しただけで、正徳 5 年

(1715年)に多くの草稿を残して没してしまつた。松雲公はその門人に遺稿の整理増補をなさしめたが、松雲公も亦數年にして没し、その事業は一時中絶した。八代將軍徳川吉宗は之を惜み、享保19年(1734年)に若水の子新助、門人丹羽正伯等に之が完成を命じ、遂に元文3年(1738年)若水の歿後30年にして遺稿638巻が完成し、合して1000巻となつた。此の書が有名な庶物類纂で、内には2723種を載せ、之を23屬に分類してある。實に本邦本草學の最も浩瀚なものである。

上述せし所によつて明かなるが如く、若水は全く本草綱目の束縛から脱し、親しく實地に調査観察し、實證的態度を以て微に入り細を穿つて此の書を作つたのである。此の書により日本本草學の基礎は確固不動のものとなつた。

斯くの如く、益軒、若水2人の偉大な努力によつて、具體的に日本本草學の基礎は確立されたが、此の偉大な功業の裏に在る時代風潮を忘れてはならぬ。彼等はむしろその時代風潮の具現者とも言うのが適當であろう。試みに、白井光太郎博士の「日本博物學年表」を見るに、如何に多くの有名無名の本草家が活躍していたかが知られる。次にその重なる2,3の人を擧げることとする。

先ず第一に擧ぐべきは阿部將翁である。(慶安3年生~寶曆3年卒...1650年~1753年)將翁は清國福建に漂流し、留ること18年、本草學を修得して歸朝した人で、博識の譽が高く、種々の方面に貢獻する所が多かつた。又その門人田村藍水も有名で、幕府醫學館の初代本草學教授に擧げられ、「琉球産物志」等の名著がある。又この藍水の門人には有名な平賀源内がある。

又一方若水の門下には多くの俊才が輩出した。特に本草一家言の作者松岡恕庵、庶物類纂の完成者丹羽正伯、和蘭本草和解の野呂元丈等がその優なるものである。

又此の外に本草家として活躍した人には後藤梨春がある。此の人には本草綱目會讀莖等の多くの著述があり、又採藥使とし、藥園經營者として活躍した植村左平次がある。此等の人々は或は時を同じくし、或は相ついで活躍し、日本

本草學の水準を高めたのである。

此外、此の當時の時代風潮を最も有力に物語るものに、所謂物産會がある。物産會は藥品會とも稱せられ、多くの本草家が全國を跋涉して蒐輯した標本を持ちよつて開く陳列會のことである。このことは、その當時如何に本草學が普及し、如何に空疎を排して實證的であつたかを如實に示すものである。此の物産會は田村藍水が寶曆7年(1757年)に江戸湯島で開いたのが初めであり、その後徳川の世を終るまで、各地で數多く開かれた。特に平賀源内は、寶曆9年10年の2回に涉つて湯島で物産會を主宰し、その展覽目錄に解説を加え、物類品鑑を作つた。之は物産會解説書のはじめをなすもので有名な書である。

斯くの如く、益軒、若水ならびに之につづく多くの俊才を得、之に加ふるに後に述べるが如く、蘭學の影響によつて、より科學的に、より正確精密となつた日本本草學は、順風に帆を擧げるが如く、遂に享和3年(1803年)小野蘭山が本草綱目啓蒙を完成するに至り立派な實を結び、日本本草學は大成された。

小野蘭山は松岡恕庵の門に入つて本草學を修め、恕庵の歿後は獨學で早くから一家をなした人である。蘭山の一生は本草の採集、讀書、著述に終始し、特に寛政12年(1800年)には老齡72の身を以て、甲、駿、濃、信、勢、紀等の諸州に採藥旅行を行い、その翌年には富士の六合目で植物採集を行つている。此によつても、蘭山の本草學への熱情の一端を知り得る。斯くの如き彼の70年間の本草學の造詣を傾けて作られたのが、此の本草綱目啓蒙で、彼一生の結晶とも稱すべきものである。此の書には、凡そ1882種の本草を載せ、その各々につき、歴代諸書の記載する漢名、和名、諸州の方言、羽毛、鱗介、根莖、花葉の形色、産地の異同等に至るまでを條陳し、その疑義を明かにし、誤謬を正し、博引傍證、誠に日本本草學を集大成したものである。

以上を要するに、此の時代に於ては、本草學は異常に進歩普及し、完全に中國の支配を脱し、日本的な本草學は樹立された。従つて、優秀な

著述も数多くあるが、次にその 2, 3 を挙げることにする。

貝原益軒……大和本草

稻生若水……庶物類纂 食物傳信録 物産目録

阿部将翁……上言本草 採藥使記

松岡恕庵……本草一家言 食療正要 怡顔齋十品考

野呂元丈……和蘭本草和解

田村藍水……琉球物産志

平賀源内……物類品隣

後藤梨春……本草綱目補物品目録 本草綱目會讀荃

小野蘭山……本草綱目啓蒙 花囊 大和本草會議 通史昆虫草木略 蘭山十品考

3. 和蘭折衷時代

和蘭折衷時代とは大體に於て小野蘭山の本草綱目啓蒙が完成した享和 3 年 (1803 年) から徳川の世を終るまでで、日本本草學と和蘭博物學とが互に刺戟し合い折衷へと進んだ時代である。

蘭方博物學が我國の本草學と関係をもちはじめたのは、此の時代に創つた譯ではない。元祿 3 年 (1690 年) にはドイツ人 ENGELBERT KAEMPFER が長崎に留ること 2 年にし、我國の動植物を研究し、安永 5 年 (1776 年) には、スエーデン人 KARL PETER THUNBERG が來朝し、長崎に 2 年滞在し、*Flora japonica* の名著があり、更に又少し遅れて、ドイツ人 PHILIP Siebold が文政 6 年 (1823 年) に長崎に來朝し、留ること 7 年にして、日本の動植物を研究して *Fauna Japonica* 及び *Flora Japonica* を作つた。此等の人は直接間接に我が本草家を指導し、多くの影響を與えた。即ち我國に於ける蘭學の隆盛と、

外人の來朝によつて、我が本草學は新しき知識と刺戟とを受けた。例えば若水の門人野呂元丈の和蘭本草和解及び大槻元澤の蘭畹摘芳の如きはその先驅をなすものである。その後、宇田川榕庵が天保 4 年 (1833 年) に植物啓源を作るに及び、科學的な西洋植物學は完全に我國に紹介され、爲に我本草學界は大轉向を行つた。

今その轉向に就いて考えるに、二つの方向がある。その一は蘭學の方法を應用して、日本本草學を完成せんとするものであり、その二は、日本本草學を材料とし、之を蘭方の方法によつて再編せんとするものである。即ち前者は日本本草學の色彩が濃く、後者は蘭方博物學の色彩の濃いものである。日本本草學の色彩の濃いものの代表作には、山本亡羊の格致類篇、曾占春の成形圖説、屋代弘賢の古今要覽考等が挙げられ、蘭方博物學の色彩の濃いものには、飯沼慾齋の草木圖説、伊藤錦窠の泰西本草名疏等が挙げられる。漢方醫藥學と蘭方醫藥學との折衷は失敗に終つたが、日本本草學と蘭方博物學との折衷は成功し、夫々の方向に發展し、見るべき成果を挙げ、今日にまで及んでいる。

此所に注意すべきは、此の時代の折衷學は日本本草學の色彩の濃きものと、和蘭博物學の色彩の多きものとの別はあるが、その何れも全く藥學の支配から脱し、藥學の爲の學ではなく、植物の爲の植物學、生物の爲の生物學となつてしまつたことである。従つて私は序説に於て詳論した如く、此の折衷學は既に本草學ではなく、博物學と成りおぼせたものである。本稿は藥學を目的とする本草學を述べるに限つた。故に此の折衷學は後日發表する「徳川時代の博物學」に譲つて詳説することにする。

(武田研究所)

— 昭和 23 年 12 月 19 日武田薬工研究所に於ける生薬學會の講演要旨 —

會員の訃報

本會會員神戸女子薬學専門學校生徒紫竹千恵子嬢は本年 8 月 31 日に心臟脚氣のため急逝されました。前途に多くの夢を残し若くして此の世を去つた同嬢を哀惜すると共に此處に會員諸氏にお報せし共々御冥福を祈りたいと存じます。

昭和 24 年 10 月 1 日 日本生薬學會